

草津市立矢倉小学校通信 令和2年7月15日 NO.7



やぐら通信

～ひとみキラキラ豊かな心と体の矢倉っ子～

子どもが変わるときのこと

この子は変わってきたなと感じることがある。それはずっと気にかけてきたからこそ感じられることなのか。毎日、おきまりのことをしているなかで、ちょっとした変化が見える瞬間がある。もちろん、それは期待はずれのこともあるのだが、そんな場合は、すこし後戻りするようにして、見守り、応援するような雰囲気をつくるようになっている。それが、本人の背中を後押しすることに、そして一人ひとりを支える仲間づくりにつながっているように思えるからだ。

毎日のように校長室にやってきて、習字がしたいと列をつくってくれる常連の1, 2年生。こちらとしては3年生の書写につながるように、筆で書くことをこわがらず、慣れてくれるだけでいいと、そういう構えで、子どもたちとのやりとりをたのしませてもらっている。もちろん、基本的な筆の持ち方や片方の手で紙を押さえること、順番や時間を守ること、終われば手洗いをすることなど、約束ごと、ちゃんとある。

最初は「書きたい！書きたい！」と何度となく訴えて列に加わったはずなのに、自分の番になったら、だまりこくってじっと待っているだけになることも多い。やりたい気持ちは確かなのだろうが、具体的にどうするといいのかわからないイメージできていなかったからだろう。こうなると、やっぱり自分は最後でいいと列の最後に並びなおしたり、急に見学すると言い出したりするからほほえましい。そんな引っ込み思案な子どもでも、やがて最前線に立つことになる。それでも固まってしまうと、こちらから何を書きたいか確かめ、それならここからスタートするといくと、書き始めのポイントを指で押さえる。慣れてきた子の中には、「はよして」とか「できひんかったらやめとき」などと、自分の番が早く来るようにしたいからだろう、きついことをいう子が出てくる。そんなときは、すかさず、「だれだって、はじめはドキドキしてたと思うけどなあ…。そんな言い方は、ちょっとイヤやんか…。どう？」こうして居合わせた子らの同意をとりつけると、はっと気づいて態度が変わる。やさしい雰囲気が生まれる瞬間だ。

たかが筆を使った落書きだ。しかし、一定の手順にそって約束ごとを守りながら作業するとなると、間違っただけではいけない、うまくやらなければと、確かに緊張しなければならなくなる。書くことそれ自体は個人の問題なのだが、これを見守る周囲の者と、いっしょになって取り組む一体感を生みだしていく。初めての子が書き終わった瞬間、本人はもちろん周囲の子らも息を止め、自身を書き手に重ねていたのだろう、「はああっ」と大きく息をすることさえ。書き手にとっては、安心して取り組めることにつながり、固唾をのんで見守る側の子らにとっては、やがてまわってくる自分の番に向けてのイメージトレーニングにつながる貴重な場面である。子どものちょっとした変化は、こうした一人ひとりが互いに支えあっていこうとする場を繰り返し体感することで立ち現れるのではないだろうか。

経験不足だ、引っ込み思案だ、じっとしているばかりで何を考えているのやら…などと、気になる子どもの姿が話題になることが多い。子ども同士のつきあいかたもそうだ。どう言葉をかけていいのか、相手が気分を害さないようにするためにはどう接するといいいのか、悩みの種はつきないものだ。だれだって同じことで悩んでいるんだなとそれとなく了解でき、応援しあえる雰囲気づくりを土台に、変わる子どものすがたを見届けていきたい。

校長 大林道範